【教育目標　夢中になる　ともに創る】

きらきら

新潟市立沼垂幼稚園
園だより
令和５年６月２日発行

「夢中になる　ともに創る」の　はじまり

園長　青木博子

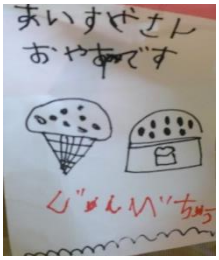
年長組５歳児の「夢中になるともに創る」姿を,「アイスクリーム屋さん」の様子から紹介します。

右の写真は，アイス屋さんが完成したときの写真です。それは，ある朝，担任が，登園前の５歳児の部屋の製作コーナーに，透明カップの容器や色とりどりの緩衝材，綿，カラーパッキンなどを置いたことから始まりました。

登園した後，すぐに１人の子どもが，綿や緩衝材をつかって，黙々と製作を始めました。アイスクリームです。そこへ友達がやってきて，一緒に作り始めました。２人は，一緒に作りながら，素材の詰め方や飾り方を工夫し始めました。

次の日，２人は，登園するとさっそく，アイスクリーム作りに必要なものを運び，作り始めました。すると，新たにＡさんが加わりました。３人は，互いにトッピングの話をしたり，互いの作ったアイスクリームをヒントにしたりして，様々な作り方を試していきました。その様子を見て，ほかの子どもたちも興味を持ち，一緒に作り始めました。おいしそうなアイスクリームが次々とできあがり，小さな座卓テーブルの上にいっぱいになりました。すると，それを見ていた友達が，「アイス屋さんにしたらどう？」と提案しました。「いいね！」と３人は賛成し，うれしそうに笑い合っていました。

さらに次の日。３人がアイス作りをしていました。ほかの子どもがラップの芯をつなげたものを，つい立に付けていました。担任が尋ねると，「電気（ライト）だよ。アイス屋さんは光っているから」。つい立には，段ボールで，屋根も付けてありました。さらに続けて，「看板も作ったよ」と。担任が目をやると，そこには，「あいすやさん」の文字とアイスクリームのイラストが描かれた看板がありました。さらに，アイスがなくなったら閉店だと伝えるために，看板に「おやすみです」と書き加えました。文字への関心も高まり，自ら文字を付け加えていったのです。



看板を見ていたＡさんは，看板を紐に付けて，屋根の上からぶら下げました。「看板に紐を付けて上がったり下がったりできるようにしよう」「細長い箱をテープで付けてみよう」と考えたことを言葉にしながら，上下に動く看板作りが始まりました。Ａさんはアイス屋の開店閉店を，上下に動く看板で知らせようとしているのです。しかし，看板作りはうまくいきません。「紐が落ちないようにしたい」諦めずじっくり考えていました。そして，ついにペットボトルのキャップを紐に付けてストッパーにすることを考えついたのです。しかし，具体的にどのように作ればよいのかとさらに試行錯誤が続きます。

そのとき偶然，たまたま近くを通りかかったＢさんは，Ａさんの看板作りの様子をじっと見ていました。ＢさんがＡさんに「どうしたの」と声を掛けました。Ａさんは「ここにキャップを付けて（看板が）落ちないようにしたいんだ」と言いました。少し考えたＢさんが「テープは，紐の下においたらどうかな？」。「そういうことか！」とＡさんが，はっとします。それからＡさんとＢさんは「ここ押さえるよ」「ありがとう」「キャップはこっちの向きがいいね」などと話し合いながら，協力してストッパーを完成させたのです。上下に動く看板の完成です。Ａさんは友達と看板を作り上げた喜びを感じていました。上下する看板を作るという共通の目的をもってやり遂げたＢさんも，満足感を味わいました。相手の気持ちに気付いて互いに助け合う姿が見られたのです。

Ａさんは，アイス屋には開店閉店を知らせるための看板があるとよいことや，その看板が上がったり下がったりするとよいと考えました。それが，目的意識となり，必要感をもち，試行錯誤して追究する原動力になりました。それにより，うまくいかないことがあっても，諦めることなく考え続けました。また，周りの友達に困っていることを言葉で伝え，手を貸してもらいながら，Ｂさんと協力して動く仕掛けのある看板を完成させました。目的意識をもつことが，「考える力」を育むのです。

担任は，子どもが扱い慣れている素材を選び抜き，多種類かつ十分な量を準備して，製作を支援しました。そして，魅力的なお店にするための提案をしました。その後は，ひたすら，子どもが目的に向かって夢中で追究する様子を見守り続けていました。それは，子どもが自ら自分の言葉で友達に伝えることが大事であること，何より子ども自身が自らの力で発想し，試したり，気付いたりして解決することを大切にしていたのです。

「夢中になる　ともに創る」姿は，「楽しくてたまらない」や「どうしてもなんとかしたい」という目的の実現に向けた，子どもの強い思いや願いに支えられています。教師は，先回りせず，子どもに寄り添い言葉掛けのタイミングを考えていきます。
このプロセスを大切にしていくことで，さらに子どもは，より多くの友達と，ともに創り出す「協同性」へと向かうのです。